

## 「石仏から見る船橋周辺の女人講」

藤 由美

### (1) 海辺の街道筋で、女性たちが建立した石塔に出会って

- ・本町二丁目「西向き地藏」の延命地藏像塔 「万治元年(1658)」「念仏講中間 拾貳人 同女人十六人 さんや村」の銘
- ・貞享4年8月20日(1684) 印内町一丁目 木戸内地蔵堂 「成瀬地藏」「念仏講連衆」 女人名19名
- ・本町三丁目不動院の六面石幢 「奉新造六観世音 女念仏講為二世安楽 元禄十四(1701)巳年今月今日」、六観音の浮彫りの下には、「獵師町横丁 不動院月栄代」「妙真 妙案 妙栄 妙涼・・・」の尼と思われる法名が19名、「おふう おい女 およし・・・」などの女性の俗名20名が刻まれている。



### (2) 薬円台近辺の女性たちが信仰した石仏・石祠

#### 1. 十九夜塔

前原東五丁目 道入庵の如意輪観音像塔

- ・宝永2年(1705)11月19日建立 銘「十九夜講」
- ・宝永4年(1707)10月20日建立 銘「奉造立為現当安楽也 十九夜講中」

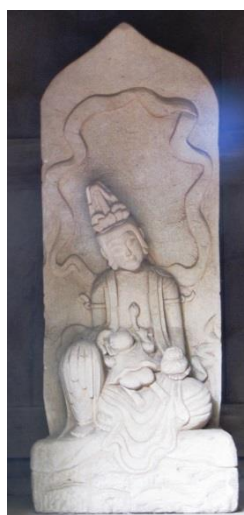


## 2. 子安神の石祠

- ・薬田台一丁目 神明社 寛政 3 年（1791） 「子安大明神」 石祠
- ・飯山満町三丁目 光明寺 享和 3 年（1803） 「子安大明神」 石祠
- ・前原東五丁目 御嶽神社 文化 2（1805） 「小安大明神」 石祠（写真⇒）

## 3. 子安像塔

- ・米ヶ崎 無量寺 安永 8 年（1779）「十九夜講」
- ・東町 不動院 文政 7（1824）「当村講中」
- ・飯山満町三丁目 王子神社 明治 3 年（1870）「子安大明神」



### (3) 十九夜塔とは

女性が寺や当番の家に集まって、十九夜講を開き、如意輪観音の前で経文、真言や和讃を唱える行事を「十九夜講」と呼び、十九夜講が、願の信仰対象あるいは成就のあかしとして建立する石塔が「十九夜塔」である。

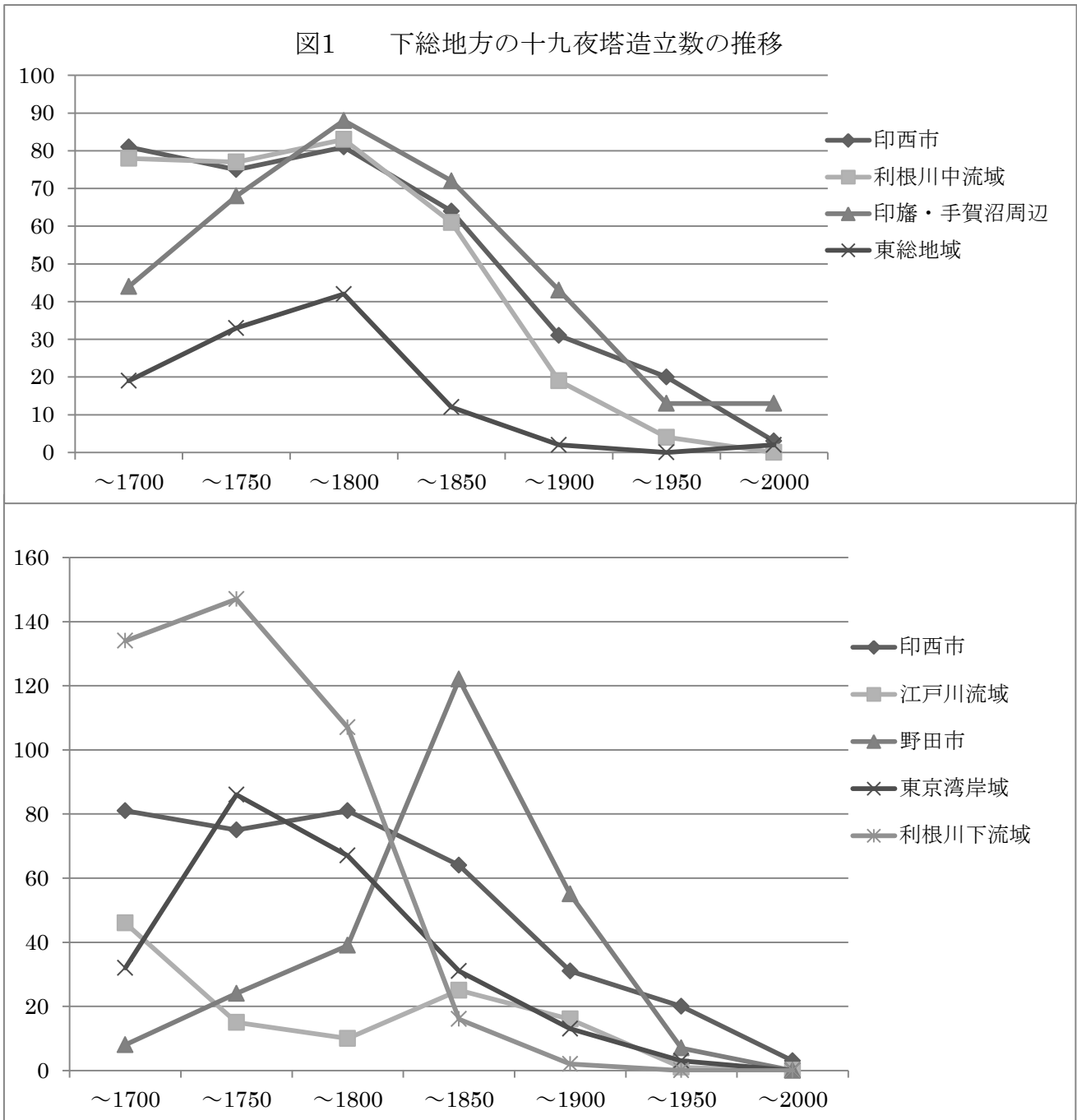
「十九夜塔」には、右手を右ほほに当て首をかしげ、右ひざを立てて座る姿の如意輪観音像が主尊として彫刻されているか、「十九夜」の文字が刻まれている。

「十九夜念仏供養 二世安楽」などの銘文と如意輪観音像を刻んだ典型的な十九夜塔が盛んに建てられるようになるのは、千葉県内では寛文 8 年（1668）ごろからで、その頃の像容は、二臂より六臂の如意輪観音像が多く、まれに立像や聖観音像や地藏像の十九夜塔も見られる。

- ・田喜野井正法寺 延宝 5 年 8 月 19 日（1677）如意輪観音の珍しい立像  
「十九夜講 如意輪観世音菩薩 現未来願成就為菩提也」 (⇒)
- ・高根町 観行院墓地 元禄 11 年 2 月 19 日（1698）「十九夜念仏祈」
- ・海神六丁目 大覚院 享保 8 年（1723）  
「十九夜念仏講 為二世安楽也」
- ・印内 光明寺 文化 9 年（1812） 「十九夜講中」



図1 下総地方の十九夜塔造立数の推移



#### (4) 十九夜講の信仰

十九夜講の信仰実態は、旧暦19日に女性が（基本的に）当番の家に集まり、如意輪観音像（子安観音像もあり）の「十九夜さま」の掛け軸に香炉や灯明、新しく炊いたご飯を供える。特に妊産婦のための安産祈願が重要視され、お供えしたご飯や丸もちは、安産のご利益があり、また燃えさしのろうそくを護符として持ち帰ってお産の時に灯すなど、女性たちの安産祈願を主とした安産信仰の講でもあった。

十九夜講は、江戸前期から中期、関東北東部で盛んに行われていたが、つくば市北条新田の江戸初期の寛永十年（1633）の十九夜塔などでは「十九夜待」ではなく、「十九夜念佛」と刻んでいることから、十九夜塔は「二十三夜塔」のような「月待塔」ではなく、月に一回、十九日という日（夜）を決めて念仏の集まりを行う「念仏供養」塔であったと推測される。（なぜ19日かは不明）

念仏は「十九夜念仏和讃」\*なども唱える。十九夜念仏和讃\*の内容は、毎月十九日に集まって、十九夜念仏を唱えれば、血の池地獄に堕ちた女人を如意輪観音が救済して下さるという内容である。「血の池地獄」



とは、「血盆経」という室町時代に中国から伝来した差別的な偽経に出てくる地獄のことで、月経とお産で流す血の穢れから女性が逃れられない恐ろしい死後の世界とされる。

当初の十九夜講は、現世安楽と来世での女人救済を祈願する「十九夜念仏」の性格も強かったが、江戸後期には、安産子育ての現世利益を祈願する性格が強くなり、やがて「子安講」へと移行していった。

\*「帰命頂礼 十九夜の由来を詳しく尋ねるに数多の諸仏集まりて、若き女の大厄は、難産除けの祈祷にて、火水を改め身を清め十九夜待をするならば、慶長元年酉の三月十九日 十九夜念仏始まりで、雨の降る夜も降らぬ夜も・・・」

#### (5) 子安神を祀る石祠

生殖と子孫繁栄を祈願する子安信仰は、丸石や石皿（擦り石）、Y字の枝、タカラガイ（子安貝）、女性を表す様々なシンボルが先史時代から祠などに祀られ、また道の分岐点などに祀られる「道祖神」など含め、どの集落でも普遍的に継続してきた。

北総で子安神を祀る石祠は、元禄 16 年（1703）八千代市上高野子安神社の「子安大明神」石祠を初出として、江戸前期から多数みられ、船橋市域でも前出の薬田台神明社や前原東御嶽神社の石祠のほか十数基を数える。

- ・大穴町 神明神社 「子安明神」石祠 安永 7 年
- ・中野木町 八坂神社「子安大明神」石祠 寛政 3 年（1791）
- ・田喜野井 子神社「子安大明神」石祠 寛政 3 年（1791）

#### (6) 十九夜講から、子安講と子安像塔へ

女人講の信仰が二世安楽・女人成仏を念ずる月待の十九夜講から、安産子育て祈願の子安講への変化に従って、石塔も江戸後期以降、如意輪観音像中心の十九夜塔から、「子安観音」や「子安明神」などの子安像を刻んだ子安像塔へと替わっていき、明治以降はほとんどが子安像塔になる。

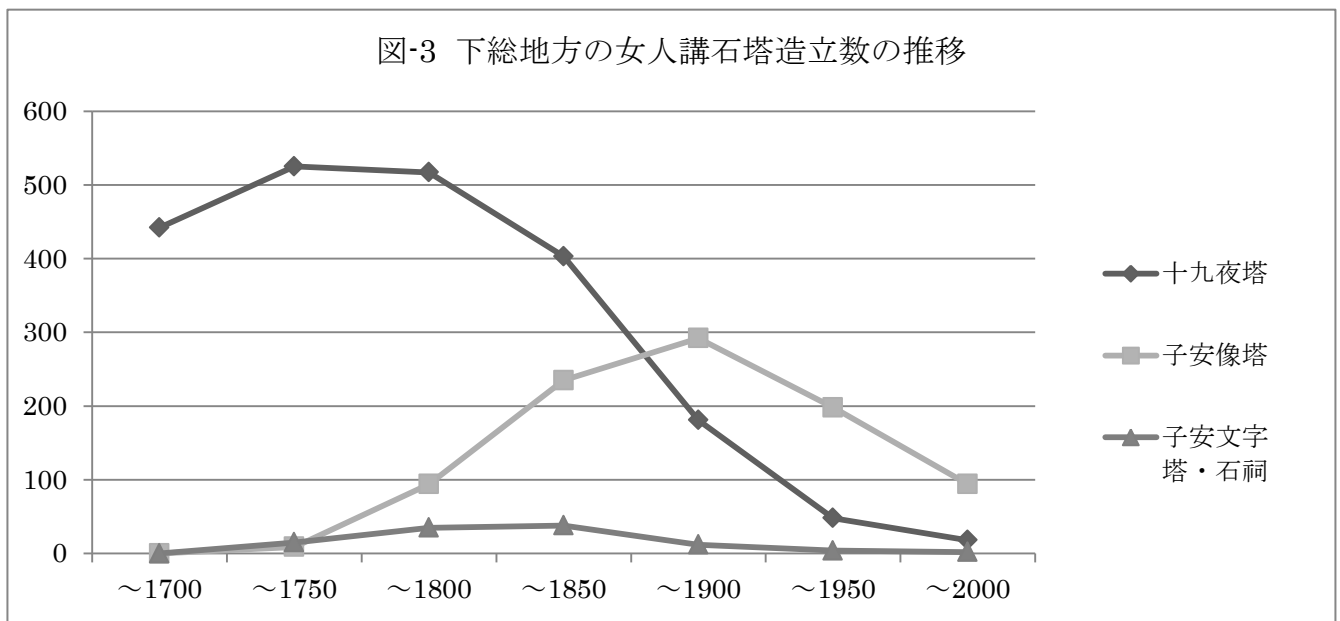
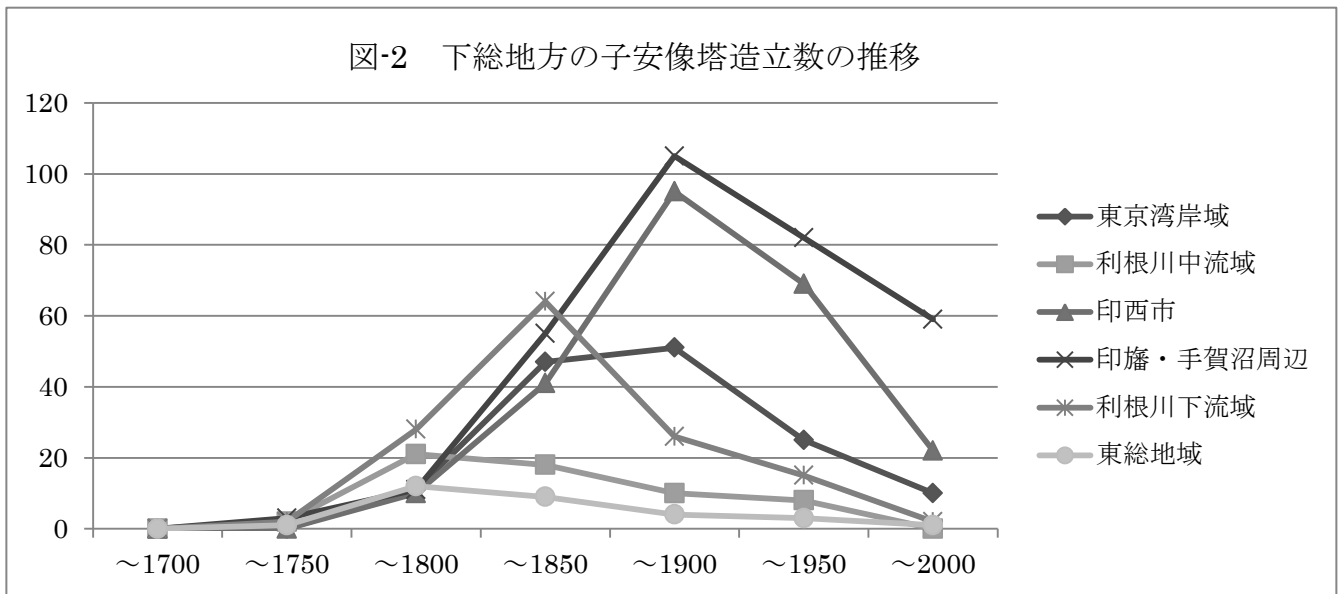
船橋市域でも、米ヶ崎 無量寺に安永 8 年（1779）、如意輪観音に子供を抱かせた子安像塔が現れ、現代まで二十数基の子安像塔が建てられている。

- ・金堀町 竜蔵院 天明 5 年（1785）「子安講」 光背型
- ・車方 神明神社 文化 7 年（1810）「女講中」 光背型
- ・高根町 神明社 文政 7 年（1824）「女人講中」石祠型
- ・古作町熊野神社 明治 20 年（1887）光背型



文政7年（1824）の高根町神明社の子安像塔は、石祠の中に子安像を浮き彫りした神仏習合型の珍しい形態の子安塔である。

なお子安塔は、市川市域など江戸川沿いの地域では、近代でもほとんど建立されず、古作町の熊野神社の子安塔が、下総で一番西ということになる。



### (7) 千葉県での子安像塔の成立のプロセス

江戸時代末に如意輪観音の十九夜塔に代わって北総に普及した子安像塔は、仏教の儀軌にはない像容である。千葉県で最古の子安像塔は、袖ヶ浦市百目木（どうめき）の元禄4年（1691）の銘の「子安大明神」像で、石祠に母像と2児がいるという特徴があるが、周辺での連続した普及は見られず、この特徴をもつ子安像塔は、元文5年（1740）酒々井町に現れる。

また利根川南岸では同時期、仏像を思わせる光背型の子安像塔が作られ、印旛沼東岸では、宝暦年間（1750年代）思惟相の如意輪観音像に子を抱かせた像が、さらに安永年間（1770年代）にそれらの各要素がクロス

した子安像塔が、北総各地に点在していく。江戸後期以降の子安像塔は、石工と発注者の好みでデザインされ、明治以降は、パターン化した像容が普及する。



袖ヶ浦市  
百目木子安神社  
元禄4年 (1691)



酒々井町  
柏木 新光寺墓地  
元文5年 (1740)



酒々井町  
下岩橋 大仏頂寺  
延享元年 (1744)



酒々井町  
伊篠 白幡神社  
明和7年 (1770)



香取市  
虫幡日向山薬師堂  
元文5年 (1741)



栄町  
西新田霊園  
元文5年 (1741)



酒々井町  
尾上住吉神社  
宝暦元年 (1751)



酒々井町  
酒々井朝日神社  
宝暦4年 (1754)

## (8) 船橋周辺の現代の女人講 - 八千代市の事例から

### 1. 高津新田の子安講 (2002年4月14日取材)

検見川道沿いの高津新田では、毎月15日に「子安講」が行われている。子安講は安産・子育ての神である「子安様」を祀る若奥さんの講で、信仰的な集まりであるが、農繁期でもかならずお嫁さんを出席させることになっていて、昔からお嫁さんたちの息抜きの場であり、骨休めのレクリエーションでもあったという。

最近はお勤めにでられる方も多く、当番の方の都合によっては15日に近い日曜日に行われることもある。講のある日は、当番が朝、諏訪神社の「子安様」にお神酒を上げる。子安様は、諏訪神社本殿右脇の祠に祀られている元治2年造立の子安観音と子安地蔵の2体の石仏である。

午後からは、高津新田西集会所に若奥さん方が十数人





集まり、飲食とおしゃべりを中心に懇親の会を開いていた。以前は、当番の家や諏訪神社のお堂で行っていたが、今は西集会所か公会堂のどちらか当番の住まいに近い場所で行っている。

特に宗教的な儀礼はないが、懇親の会の終わりごろに、「子安様」と「ごちそうさま」の「ハツセ」を全員で謡う。ママさんコーラスのようなきれいな声の斉唱で、ゆっくりとしたメロディが印象的であった。高津新田では子安講のほかに、その上の世代の婦人による念仏講が行われていたが、現在は行われなくなっていて、そのため子安講もやや年齢が高くなっているとのことであった。

## 2. 高津の子安講 (2005年2月19日取材)

高津は、中世に遡る検見川沿いの旧村である。旧家の結婚した女性たちは現在も、観音寺本堂に毎月19日に集まって「子安講」を開く。十九夜講に由来する19日の開催日は、他地区のように週末に移動させることなく、今も伝統を受け継がれている。

2005年2月19日は、28人の講のメンバーのうち18名が参加し、子供連れの参加もあってなごやかな雰囲気の中で講が開かれていた。正午ごろ、参加者は、まずは昭和59年に境内に建立された「水子地蔵」に参拝する。水子地蔵の背後の壇上には、延宝2年(1674)の十九夜塔から現在の子安塔まで15基の女人講の石仏\*が並んでいる。



本堂右陣では昼食の準備がされている。その日は午前中から4名の当番が3升の米に鶏肉をしょうゆ味で炊きこんだ鳥飯をつくる。そのほか、漬物、具が多い味噌汁、コロッケ、生野菜と決まっている。

会費は月500円、それに、杓にいっぱいのお米をあらかじめ集めておく。二つの3合強ほど入る杓は、「昭和三十二年三月十七日 子安講」の墨書があり、今も大切にされている。

食事が終わると、世話人さんが、翌月の春休みに坂東33観音霊場巡礼の手続きなどの事務連絡をしていた。数年~十年ぐらいの間隔で行われる秩父巡礼は、女性が一生に1回行くことになっていて、子安講を卒業し中年を過ぎて余裕もできたころから、「秩父参り」に参加することが多かったが、現在は、子安講から秩父や坂東観音霊場巡礼\*3に参加することは珍しくない。

ヨメを迎えて子安講を卒業すると、しばらくして念仏講\*2に誘われる時代もあったが、子育てが終わってもそのままとどまることもあり、また最近では中年講に入る人もいる。中年講は、高津比咩神社の前の自治会館で毎月最終日曜日に集まっているが、「拝む」ことなど民俗宗教的なことはない。

高津の子安講では、現在は33年に1回、子安講の供養塔を建てることと決めているとのこと。毎月集金する500円の講費から「イシダテ」の費用を積み立てる。

食後のおしゃべりが一段落すると、「そろそろ拝みましょうか」といって、一同本堂内陣に移動し、本尊の十一面観音の前に正座して、「子安講のハナミ」を美しいコーラスでゆっくりと唱和する。

「拝んだ」あとは、また卓を囲み、ケーキなどお茶菓子をいただきながら、懇親を深めるといのが、現在の子安講に姿であった。

### 子安講のハナミ

一、めでたやな これのおざしき ところよろこぶ はばをとる なにごともかきとるように ひとのもちいのあるように ひとのもちいのあるように

二、このむらのあねさまがたは どこへまいるか おそろいで みをきよめ  
かみを清めて 子安様へと ごさんけいに 子安様へと ごさんけいに  
三、このむらのあねさまがたは やなぎだるをひきさげて まずをはつを 子  
安様へ あとはおぎえとひろめする あとはおぎえとひろめする

補遺：\*1. 最新の子安塔は平成 26 年（2014）9 月 19 日造立。（⇒）  
前回の昭和 57 年（1982）の 33 年後。

\*2. 念仏講は、平成 23 年（2011）に解散した。

\*3. 平成 22 年（2010）に西国坂東秩父百観音巡礼の「大願成就記念碑」を女  
性たちで建立。平成 3~22 年の巡拝の日程と人数が刻まれている。



### 3. 麦丸の「子安びしゃ」(2016年3月17日取材)

八千代市麦丸地区の子安講の民俗行事である「子安びしゃ」（「女オビ  
シャ」）を取材。「子安びしゃ」（「女びしゃ」ともいう）は、今も毎年3月  
17日に、東福院境内の「やすらぎの家」で行われている。ご馳走の用意  
などは、数年前からはかなり省略されてはいるが、「花見」歌の唱和⇒新  
旧当番が盃を交わす「おとうわたし」⇒宴会⇒「おつもり」の唱和などの  
儀礼と、新旧の当番とそれを助ける「はたらき」による行事の執行体制は  
よく保たれている。十年位前までは、子安講も毎月行われていたが、現在  
は年一回の「子安びしゃ」のみが行われている。

盛り米に桜の枝と鶴亀を飾った蓬莱や灯明、七つの具の入った神饌な  
どもよく伝統を維持していて、特に子安講の本尊「子安大明神」の掛け軸  
は、文化15年奉納の貴重なものである。

当番が花を手向けた東福寺境内の子安さまの祠には、文化7年「子安  
大明神」銘の石祠をはじめ、大正・明治の子安像塔が祀られている。

